

Junior College two-year course (Correspondence course) Relationship between workplace cooperation and student life conditions in nursing students' Learning

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松原, 渉, MATSUBARA, Wataru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001205

報告

2年課程（通信制）短期大学看護学生の学習における 職場からの協力の有無と学生生活状況との関連

松原 渉¹⁾

Junior College two-year course (Correspondence course) Relationship between workplace cooperation and student life conditions in nursing students' Learning.

Wataru MATSUBARA¹⁾

要旨

【目的】 学生の学習における職場からの協力の有無と学生生活状況との関連を明らかにする。

【方法】 質問紙調査を行う。職場からの協力の自覚で「協力職場」と「非協力職場」の2群に分け、学生生活状況では「レポート課題に対する状況」8項目、「その他の学習状況」10項目、「成人期に関連する状況」17項目についてそれぞれの平均値の比較を t 検定により実施する。

【結果】 1 有効回答は76部で内訳は「協力職場」58部、「非協力職場」18部である。

2 両群の間で「レポート課題に対する状況」「その他の学習状況」では関連はないが、「成人期に関連する状況」の『職場は勤務調整に協力的である』『時間的に忙しくなった』『睡眠時間が短くなった』の3項目で関連がある。

3 両群共に『職場は経済的な支援をしてくれている』の平均値が最も低かった。

【結論】 職場協力では勤務調整の配慮が必要である。時間的制約が厳しい中、目標達成を目指す学習姿勢が示唆された。

キーワード：2年課程（通信制）、職場協力、学生生活状況

Abstract

【Purpose】 We will examine the relationship between the presence or absence of cooperation from the workplace in the learning of correspondence course students and the living

1) 神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程

status of students.

- 【Method】** Conduct a questionnaire survey. Students were divided into two groups, “cooperative workplaces” and “non-cooperative workplaces” based on the awareness of cooperation from the workplace, and the average values of 8 items of “status of report assignments,” 10 items of “other learning status,” and 17 items of “situations related to adulthood” were compared by t-test.
- 【Results】**
- 1 There were 76 valid responses, of which 58 were “cooperative workplaces” and 18 were “non-cooperative workplaces.”
 - 2 There was no relationship between the two groups: “status on report tasks” and “other learning status”, but there was a relationship in three items of “situation related to adulthood”: “the workplace is cooperative in adjusting work”, “time has become busy”, and “sleep time has decreased”.
 - 3 In both groups, the average value of “the workplace provides financial support” was the lowest.
- 【Conclusion】** Consideration must be given to work coordination in workplace cooperation. Aiming to achieve goals amid severe time constraints The learning attitude was suggested.

Key words: two-year course (correspondence course), Workplace Cooperation, Student Life Status

1 はじめに

看護師学校養成所2年課程（通信制）は准看護師から看護師になるための教育機関の一つである。2年課程（通信制）看護学生（以下、T学生と略す）の学習環境は厳しいといわれて久しい。高宮ら¹⁾は、T学生が入学後の学習継続を困難にする因子は“「時間的・経済的制約および独習の苦しさ」「学習内容の難しさ」の2因子が示された”と述べている。T学生の特徴の一つとして、金川ら²⁾は、“学習する上で成人期にある学生の役割に関わる制約が多くそれによる不安を抱いている”ことを指摘している。松原³⁾は、“テキスト学習に臨む学習姿勢は入学後の学習姿勢に根ざした生活変化と強い関連がある”ことを述べている。成人期前期と成人期中期の学生生活状況の特徴について、松原⁴⁾は“家族等の成員よりサポートを前者は受けやすいが、後者は受けにくい”ということを報告

している。狩谷ら⁵⁾の、病院に勤務する准看護師を対象に通信制を選択した理由を調査した結果では、“「自宅で修学できる」「現職場を辞めなくてよい」「仕事を継続できる」の順で多かった”と報告している。西出ら⁶⁾は、入学前授業終了時調査からみる入学前の不安について、“入学前不安の9項目の質問で「やや不安」「不安」が最も多かったのは『レポート作成』であり、続いて順に『学習時間の確保』『学習内容の理解』『仕事との両立』等であった”と報告している。中島ら⁷⁾は、准看護師が2年課程（通信制）入学を希望しない理由について“「仕事との両立困難」「費用負担圧迫」「家事との両立不可」「健康上の問題」「家族の理解困難」「家族の健康上の問題」”を報告している。前田ら⁸⁾は、看護師学校養成所2年課程の最終学年在学の准看護師が進学する際、困難と感じたことについて、“【経済的な問題】【家庭と学校、職場との両立】【学校生活の厳しさ】”を報告している。

以上、T 学生の学習継続では様々な課題が報告されている。仕事や家事等との両立の難しさなどが散見されるが、今回、研究者は前田らが指摘している【職場との両立】に着目した。職場との両立では職場からの協力が T 学生の学習継続に対して必要な要件と考えたからである。本調査はコロナ禍の只中に実施した。報道機関⁹⁾が“「看護師をいくら募集しても集まりません」と報じていた時期であった。そのため T 学生の置かれた職場環境も看護師不足の状況が推測された。そのなかで職場協力はどの程度あるのか、職場協力のない学生はどのような学生生活状況なのかについて、把握することは喫緊の課題と考えた。また、職場からの協力の有無と学生生活状況との関連を把握し実態を明らかにすることは職場協力のない T 学生の学習支援の対応の一助になると考える。さらに、職場関係者や職能団体等と情報を共有する基礎資料にすることができる。しかし、T 学生における職場からの協力の有無と学生生活状況との関連の報告が見当たらない。そこで、今回、2 年課程（通信制）学生に質問紙調査を実施し、職場からの協力の有無の自覚によって「協力職場」と「非協力職場」の 2 群に分け、学生生活状況とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

II 用語の操作的定義

本研究では用語を以下のように定義した。

「職場協力」とは、仕事と就学継続の両立を目指す T 学生が、学生生活への職場からの協力についてどのように思うかという自覚のさまと定義した。

「レポート課題に対する状況」とは、主に在宅で行う独習のテキスト学習とした。

「その他の学習状況」とは、テキスト学習以外の対面授業や見学実習とした。

「成人期に関連する状況」とは、仕事や家事との両立に関する問題や家族の理解、健康上の問題、費用負担等とした。

「学生生活状況」とは、T 学生の「レポート課題に対する状況」、「その他の学習状況」、「成人期に関連する状況」の 3 つの側面より質問項目を設定し、質問から得られた回答より、どのように自覚しているかを得点化し、検定した結果を「学生生活状況」と捉える。

III 研究方法

1 対象者：2 年次で臨地実習後 3 日間の対面授業を受講した T 学生、91 名

2 調査方法：無記名自己記入式質問紙調査

3 調査時期：2021 年 7 月中旬～9 月中旬

4 調査内容

- ・「職場からの協力の有無」の質問（1 項目）
- ・属性に関する質問（7 項目）
- ・「レポート課題に対する状況」の質問（8 項目）
- ・「その他の学習状況」の質問（10 項目）
- ・「成人期に関連する状況」の質問（17 項目）

5 倫理的配慮

神戸常盤大学短期大学の倫理委員会で承認（承認番号 神常短研倫第 21-2 号）を得て、質問紙調査を実施した。本調査の目的・方法・内容、参加の自由、個人の成績評価には不利益がないこと、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、守秘義務などについて書面を使って口頭で説明し、同意を得た。同意書と一緒に同意撤回書も提示した。また、関係学会等に発表・投稿する了解を得た。

6 分析方法

「職場から協力を得られていると思う」≪どちらかといえば職場から協力が得られていると思う≫と答えたものを「協力職場」、≪どちらかといえば職場から協力が得られていないと思う≫≪職場から協力を得られていないと思う≫と答えたものを「非協力職場」として分類する。

「あてはまらない」≪どちらかといえばあてはまらない≫≪どちらかといえばあてはまる≫≪あ

てはまる」の4段階の回答で、それぞれ1点から4点を配点し得点化し、回答の傾向と偏りの確認のために平均値と標準偏差を算出した。

「協力職場」と「非協力職場」の分類後、両群の「レポート課題に対する状況」、「その他の学習状況」、「成人期に関連する状況」の平均値の比較をt検定により実施し、両群の有意差判定を行った。(p < 0.05)

IV 結果

1 「協力職場」と「非協力職場」の2群選別プロセス

調査用紙の配布数は91部、回収数は87部であり、回収率は95.6%であった。そのうち、現在「仕事なし」の回答が8部、職場協力の質問に対して「未回答」が3部あり、76部を有効回答とした。「協力職場」と「非協力職場」の2群選別プロセスについて図1に示す。対象者の就労中は全体で76部

であり、「協力職場」が58部(76%)、「非協力職場」18部(24%)である。全体の約2割が「非協力職場」であると自覚していることが確認された。

2 対象学生の属性に関する「協力職場」と「非協力職場」の概要

対象学生の属性に関する「協力職場」と「非協力職場」の概要を表1に示す。

年齢、性別、1日平均学習時間、勤務場所、勤務形態、勤務年数、入学のきっかけとも双方に大きな違いはみられなかった。

3 「学生生活状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

「協力職場」と「非協力職場」の2群間で、学生生活状況について「レポート課題に対する状況」、「その他の学習状況」、「成人期に関連する状況」に分けてそれぞれの比較をt検定により実施した結果について以下、報告する。

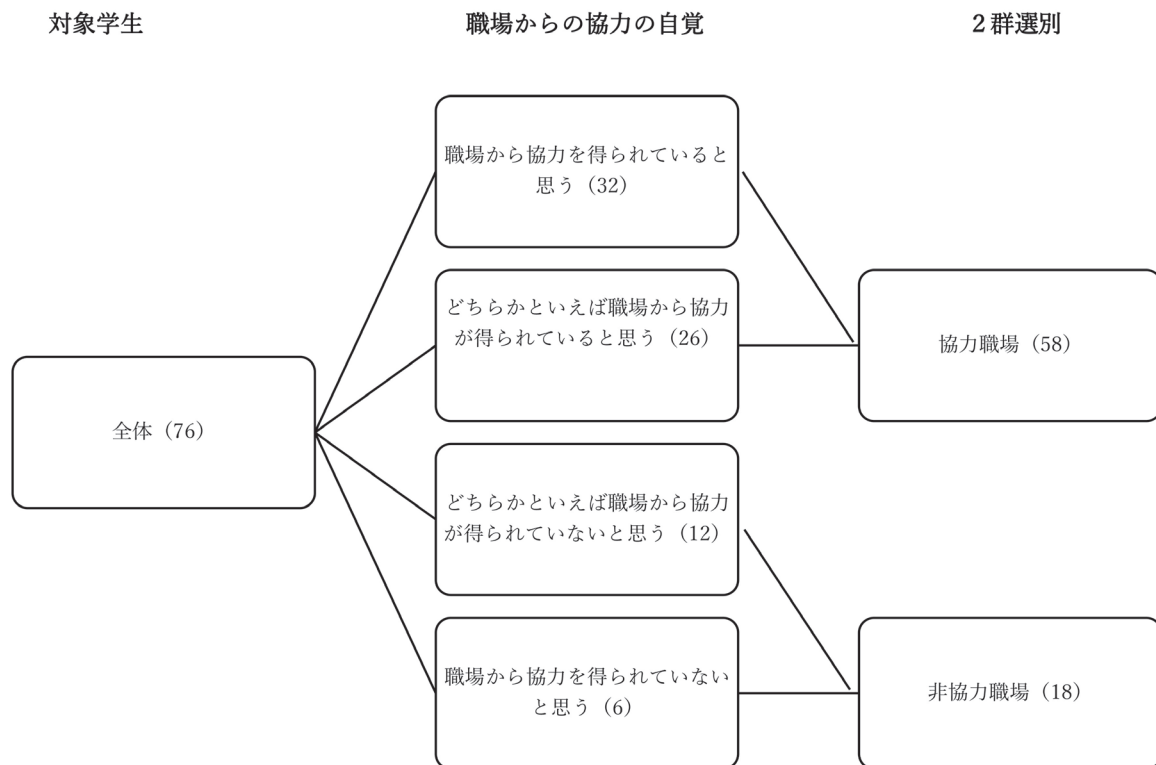


図1 「協力職場」と「非協力職場」の2群選別プロセス

表1 対象学生の属性に関する「協力職場」と「非協力職場」の概要

n=76

		職場からの協力の自覚/ 「協力職場」	職場からの協力の自覚/ 「非協力職場」
対象学生数 (%)		58 (76%)	18 (24%)
平均年齢 (SD)		44.8 ± 6.3	45.2 ± 4.3
性別	女性	51	18
	男性	7	0
	全体	58	18
1日平均の学習時間 (SD)		2.28 ± 1.25	2.04 ± 1.82
勤務場所	病院 (病棟)	27 (47%)	12 (67%)
	病院 (外来)	7 (12%)	2 (11%)
	診療所	7 (12%)	0 (0%)
	その他	17 (29%)	4 (22%)
勤務形態	日勤	25 (43%)	8 (44%)
	2交代	23 (40%)	9 (50%)
	3交代	3 (5%)	1 (6%)
	その他	7 (12%)	0 (%)
勤務年数	7年以上 10年未満	21 (36%)	5 (28%)
	10年以上 13年未満	10 (17%)	6 (33%)
	13年以上	20 (35%)	7 (39%)
	不明	7 (12%)	0 (%)
入学のきっかけ	自身の希望	42 (72%)	13 (72%)
	勤務先の勧め	6 (10%)	1 (6%)
	先輩の影響	5 (9%)	2 (11%)
	不明	5 (9%)	2 (11%)

(1) 「レポート課題に対する状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

「レポート課題に対する状況」に関する質問項目は全部で8項目であった。平均値の比較をt検定により実施し、「協力職場」と「非協力職場」の2群間で有意差判定を行った。表2に示す通り、8項目の平均値で有意差は認められなかった。

『レポートは十分に学習して作成した』の平均値は「協力職場」では3.10 ± 0.50であり、「非協力職場」の3.00 ± 0.35よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[t(34) = 0.82、p = 0.41]。

『レポートを進めるにあたって教員に質問でき

た』の平均値は「協力職場」では1.89 ± 1.11であり、「非協力職場」の1.94 ± 1.23よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[t(27) = -0.16、p = 0.87]。

『返却されたレポートのコメントは全て読んだ』の平均値は「協力職場」では3.86 ± 0.12であり、「非協力職場」の3.83 ± 0.14よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[t(26) = 0.84、p = 0.77]。

『レポートのコメントを読んで学習・修正した』の平均値は「協力職場」では3.69 ± 0.28であり、「非協力職場」の3.72 ± 0.21よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[t(33) =

-0.25、 $p = 0.80$ 】。

『レポートの精度について不安である』の平均値は「協力職場」では 3.01 ± 0.89 であり、「非協力職場」の 2.77 ± 0.88 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。 [$t(28) = 0.94$ 、 $p = 0.35$]。

『文章を書くことに関して自信がついた』の平均値は「協力職場」では 2.56 ± 0.67 であり、「非協力職場」の 2.16 ± 0.61 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。 [$t(30) = 1.8$ 、 $p = 0.07$]。

『レポートの提出期限は守ることができる』の平均値は「協力職場」では 3.60 ± 0.52 であり、「非協力職場」の 3.27 ± 0.80 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。 [$t(24) = 1.40$ 、 $p = 0.17$]。

『レポート課題に対する取り組みは楽しい』の平

均値は「協力職場」では 2.01 ± 0.75 であり、「非協力職場」の 1.83 ± 0.50 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。 [$t(34) = 0.91$ 、 $p = 0.36$]。

(2) 「その他の学習状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

「その他の学習状況」に関する質問項目は全部で10項目であった。平均値の比較を t 検定により実施し、「協力職場」と「非協力職場」の2群間で有意差判定を行った。表3に示す通り、10項目の平均値で有意差は認められなかった。

『わからないこと、困ったことがあると教員に質問している』の平均値は「協力職場」では 2.31 ± 1.13 であり、「非協力職場」の 2.33 ± 1.41 よりやや低い、両群の間には有意差がみられなかった。 [$t(26) = -0.07$ 、 $p = 0.94$]。

表2 「レポート課題に対する状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

質問項目	職場協力	n	平均値	標準偏差	df	t値	p値
1. レポートは十分に学習して作成した	協力職場	58	3.10	0.50	34	0.82	0.41
	非協力職場	18	3.00	0.35			
2. レポートを進めるにあたって教員に質問できた	協力職場	58	1.89	1.11	27	-0.16	0.87
	非協力職場	18	1.94	1.23			
3. 返却されたレポートのコメントは全て読んだ	協力職場	58	3.86	0.12	26	0.84	0.77
	非協力職場	18	3.83	0.14			
4. レポートのコメントを読んで学習・修正した	協力職場	58	3.69	0.28	33	-0.25	0.80
	非協力職場	18	3.72	0.21			
5. レポートの精度について不安である	協力職場	58	3.01	0.89	28	0.94	0.35
	非協力職場	18	2.77	0.88			
6. 文章を書くことに関して自信がついた	協力職場	57	2.56	0.67	30	1.8	0.07
	非協力職場	18	2.16	0.61			
7. レポートの提出期限は守ることができる	協力職場	58	3.60	0.52	24	1.40	0.17
	非協力職場	18	3.27	0.80			
8. レポート課題に対する取り組みは楽しい	協力職場	58	2.01	0.75	34	0.91	0.36
	非協力職場	18	1.83	0.50			

* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$

『文献資料を活用して学習している』の平均値は「協力職場」では3.20 ± 0.44であり、「非協力職場」の3.16 ± 0.73よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(24) = 0.18, p = 0.85$]。

『アセスメント能力が身についたと思う』の平均値は「協力職場」では2.81 ± 0.40であり、「非協力職場」の2.61 ± 0.48よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(26) = 1.08, p = 0.28$]。

『卒業するための単位取得は概ね問題ない』の平均値は「協力職場」では3.03 ± 1.15であり、「非協力職場」の2.72 ± 1.03よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(30) = 1.12, p = 0.27$]。

『国家試験対策に力を入れている』の平均値は「協力職場」では2.27 ± 0.97であり、「非協力職場」の2.05 ± 1.11よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(27) = 0.78, p = 0.43$]。

『本や文献をよく読むようになった』の平均値は「協力職場」では2.60 ± 0.59であり、「非協力職場」の2.44 ± 0.96よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(24) = 0.62, p = 0.53$]。

『看護に対する考え方に変化があった』の平均値は「協力職場」では3.15 ± 0.55であり、「非協力職場」の2.83 ± 0.97よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(23) = 1.27, p = 0.21$]。

『臨地実習での学びは大きかった』の平均値は

表3 「その他の学習状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

質問項目		n	平均値	標準偏差	df	t値	p値
1. わからないこと、困ったことがあると教員に質問している	協力職場／	58	2.31	1.13	26	-0.07	0.94
	非協力職場	18	2.33	1.41			
2. 文献資料を活用して学習している	協力職場／	58	3.20	0.44	24	0.18	0.85
	非協力職場	18	3.16	0.73			
3. アセスメント能力が身についたと思う	協力職場／	58	2.81	0.40	26	1.08	0.28
	非協力職場	18	2.61	0.48			
4. 卒業するための単位取得は概ね問題ない	協力職場／	58	3.03	1.15	30	1.12	0.27
	非協力職場	18	2.72	1.03			
5. 国家試験対策に力を入れている	協力職場／	58	2.27	0.97	27	0.78	0.43
	非協力職場	18	2.05	1.11			
6. 本や文献をよく読むようになった	協力職場／	58	2.60	0.59	24	0.62	0.53
	非協力職場	18	2.44	0.96			
7. 看護に対する考え方に変化があった	協力職場／	58	3.15	0.55	23	1.27	0.21
	非協力職場	18	2.83	0.97			
8. 臨地実習での学びは大きかった	協力職場／	58	3.05	0.45	28	0.37	0.71
	非協力職場	18	3.00	0.47			
9. スクーリング授業の学びは大きかった	協力職場／	58	3.08	0.57	31	-0.10	0.20
	非協力職場	18	3.33	0.47			
10. 根拠のある看護の重要性がわかるようになった	協力職場／	58	3.27	0.27	22	1.09	0.28
	非協力職場	18	3.05	0.64			

* p < 0.05、** p < 0.01

「協力職場」では 3.05 ± 0.45 であり、「非協力職場」の 3.00 ± 0.47 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(28) = 0.37, p = 0.71$]。

『スクーリング授業の学びは大きかった』の平均値は「協力職場」では 3.08 ± 0.57 であり、「非協力職場」の 3.33 ± 0.47 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(31) = -0.10, p = 0.20$]。

『根拠のある看護の重要性がわかるようになった』の平均値は「協力職場」では 3.27 ± 0.27 であり、「非協力職場」の 3.05 ± 0.64 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(22) = 1.09, p = 0.28$]。

(3) 「成人期に関連する状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

「成人期に関連する状況」に関する質問項目は全部で17項目であった。平均値の比較を t 検定により実施し、「協力職場」と「非協力職場」の2群間で有意差判定を行った。表4に示す通り、14項目の平均値では有意差が認められなかった。しかし、3項目の平均値では有意差が認められた。

『子どもの世話をする必要がある』の平均値は「協力職場」では 2.62 ± 1.67 であり、「非協力職場」の 2.44 ± 1.79 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(28) = 0.49, p = 0.62$]。

『親の世話をする必要がある』の平均値は「協力職場」では 2.06 ± 1.15 であり、「非協力職場」の 2.05 ± 1.58 とほぼ同じであり、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(25) = 0.04, p = 0.96$]。

『チームで協力して仕事をしている』の平均値は「協力職場」では 3.39 ± 0.38 であり、「非協力職場」の 3.33 ± 0.47 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(26) = 0.34, p = 0.72$]。

『困ったときは相談にのってくれる人がいる』の平均値は「協力職場」では 3.55 ± 0.42 であり、「非協力職場」の 3.50 ± 0.38 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(30) = 0.30, p$

$= 0.76$]。

『職場は勤務調整に協力的である』の平均値は「協力職場」では 3.51 ± 0.46 であり、「非協力職場」の 2.61 ± 0.72 より、極めて有意に高いことを示す。[$t(24) = 4.13, p < 0.00$]。

『年齢により学力が低下していると思う』の平均値は「協力職場」では 3.46 ± 0.60 であり、「非協力職場」の 3.50 ± 0.38 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(35) = -0.19, p = 0.84$]。

『年齢により体力が低下していると思う』の平均値は「協力職場」では 3.41 ± 0.70 であり、「非協力職場」の 3.61 ± 0.48 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(34) = -0.99, p = 0.32$]。

『時間的に忙しくなった』の平均値は「協力職場」では 3.58 ± 0.35 であり、「非協力職場」の 3.83 ± 0.14 より、有意に低いことを示す。[$t(44) = -2.07, p < 0.04$]。

『家庭との両立が困難である』の平均値は「協力職場」では 2.37 ± 1.08 であり、「非協力職場」の 2.70 ± 0.72 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(31) = -1.32, p = 0.19$]。

『仕事にやる気が出た』の平均値は「協力職場」では 2.43 ± 0.60 であり、「非協力職場」の 2.11 ± 0.92 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(24) = 1.28, p = 0.21$]。

『通学に時間がかかる』の平均値は「協力職場」では 2.94 ± 1.38 であり、「非協力職場」の 2.94 ± 1.23 とほぼ同じであり、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(30) = 0.01, p = 0.99$]。

『睡眠時間が短くなった』の平均値は「協力職場」では 2.96 ± 1.29 であり、「非協力職場」の 3.44 ± 0.26 より、有意に低いことを示す。[$t(64) = -2.49, p < 0.02$]。

『身体的にしんどくなった』の平均値は「協力職場」では 3.55 ± 0.32 であり、「非協力職場」の 3.61 ± 0.36 よりやや低いが、両群の間には有意差がみ

表4 「成人期に関連する状況」における「協力職場」と「非協力職場」の比較

質問項目		n	平均値	標準偏差	df	t値	p値
1. 子どもの世話をする必要がある	協力職場／	58	2.62	1.67	28	0.49	0.62
	非協力職場	18	2.44	1.79			
2. 親の世話をする必要がある	協力職場／	58	2.06	1.15	25	0.04	0.96
	非協力職場	18	2.05	1.58			
3. チームで協力して仕事をしている	協力職場／	58	3.39	0.38	26	0.34	0.72
	非協力職場	18	3.33	0.47			
4. 困ったときは相談にのってくれる人がある	協力職場／	58	3.55	0.42	30	0.30	0.76
	非協力職場	18	3.50	0.38			
5. 職場は勤務調整に協力的である	協力職場／	58	3.51	0.46	24	4.13	0.00**
	非協力職場	18	2.61	0.72			
6. 年齢により学力が低下していると思う	協力職場／	58	3.46	0.60	35	-0.19	0.84
	非協力職場	18	3.50	0.38			
7. 年齢により体力が低下していると思う	協力職場／	58	3.41	0.70	34	-0.99	0.32
	非協力職場	18	3.61	0.48			
8. 時間的に忙しくなった	協力職場／	58	3.58	0.35	44	-2.07	0.04*
	非協力職場	18	3.83	0.14			
9. 家庭との両立が困難である	協力職場／	58	2.37	1.08	31	-1.32	0.19
	非協力職場	17	2.70	0.72			
10. 仕事にやる気が出た	協力職場／	58	2.43	0.60	24	1.28	0.21
	非協力職場	18	2.11	0.92			
11. 通学に時間がかかる	協力職場／	58	2.94	1.38	30	0.01	0.99
	非協力職場	18	2.94	1.23			
12. 睡眠時間が短くなった	協力職場／	58	2.96	1.29	64	-2.49	0.02*
	非協力職場	18	3.44	0.26			
13. 身体的にしんどくなった	協力職場／	58	3.55	0.32	27	-0.36	0.71
	非協力職場	18	3.61	0.36			
14. 職場の人間関係は良好である	協力職場／	58	3.25	0.47	29	-0.10	0.91
	非協力職場	18	3.27	0.44			
15. 経済的な負担が大きい	協力職場／	58	3.03	0.84	25	0.51	0.60
	非協力職場	18	2.88	1.16			
16. 人間関係が広まった	協力職場／	58	3.31	0.60	27	0.90	0.37
	非協力職場	18	3.11	0.69			
17. 職場は経済的な支援をしてくれている	協力職場／	58	1.87	1.51	38	1.19	0.23
	非協力職場	18	1.55	0.84			

* p < 0.05, ** p < 0.01

られなかった。[$t(27) = -0.36, p = 0.71$]。

『職場の人間関係は良好である』の平均値は「協力職場」では 3.25 ± 0.47 であり、「非協力職場」の 3.27 ± 0.44 よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(29) = -0.10, p = 0.91$]。

『経済的な負担が大きい』の平均値は「協力職場」では 3.03 ± 0.84 であり、「非協力職場」の 2.88 ± 1.16 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(25) = 0.51, p = 0.60$]。

『人間関係が広まった』の平均値は「協力職場」では 3.31 ± 0.60 であり、「非協力職場」の 3.11 ± 0.69 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(27) = 0.90, p = 0.37$]。

『職場は経済的な支援をしてくれている』の平均値は「協力職場」では 1.87 ± 1.51 であり、「非協力職場」の 1.55 ± 0.84 よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。[$t(38) = 1.19, p = 0.23$]。

V 考察

「非協力職場」の群は、職場の勤務調整の協力が得られていないということが極めて有意に確認された。職場の勤務調整の配慮に関連して、日本看

護協会¹⁰⁾の「ガイドライン」勤務表作成者のためのQ&Aで、“基本的なルールを持ち、スタッフの皆さんにも周知して協力を求めましょう。(中略)勤務の希望を受け付けるかどうかについても、職場によって方針が異なるようです”という情報を提供している。T学生の場合、次月の勤務表作成時、履修可能な勤務表調整は最大の関心事であると推測できる。なぜなら、T学生は成人期であり仕事と家族や学校等と役割のスケジュールを調整することにより、二重予約を回避したいからである。T学生にとって、勤務調整で協力が無いという条件は、タイムスケジュールが学生生活や家庭生活とのスケジュールと二重予約になる可能性があることを意味する。勤務調整で配慮してもらえない「非協力職場」群のタイムスケジュールは仕事優先になるので、学校や家庭生活は不利益を被る、すなわち時間的制約を受けるわけである。その証拠として、「非協力職場」群は、『時間的に忙しくなった』『睡眠時間が短くなった』という、時間的制約を意味する2項目で有意に関連があることが確認されたと考える。この2項目は先の職場の勤務調整を受けることが出来ないという、しわ寄せによる時間的制約、すなわち二次障害であることは間違いのない証拠であると考えられる。

表5 学生生活状況で有意差がみられた「協力職場」と「非協力職場」の比較

	項目	協力職場		非協力職場	P値
成人期に関連する状況	職場は勤務調整に協力的である	3.51 ± 0.46	>	2.61 ± 0.72	** $p < 0.00$
	時間的に忙しくなった	3.58 ± 0.35	<	3.83 ± 0.14	* $p < 0.04$
	睡眠時間が短くなった	2.96 ± 1.29	<	3.44 ± 0.26	* $p < 0.02$

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

1 職場からの勤務調整配慮の重要性

職場からの協力の有無と『職場は勤務調整に協力的である』との関連が強かった理由について考える。中島ら¹¹⁾は、通信制で学ぶ准看護師の仕事と両立させるための学習環境について看護部長対象にアンケート調査を行い、“「通学できる三交代を組む」「テスト前の休日保障」「通学の条件に合う職場への異動」「特別休暇の設置」「放送大学の教材・ビデオ購入」「奨学金制度の創設」などであった”と報告している。水上ら¹²⁾は、看護師2年課程通信制進学のための就学支援策として、“准看護師と看護部長を対象にアンケート調査を行い、就学支援策は貸付金制度、奨学金制度などの経済的支援や、通信制のイメージがつくような説明会を実施することが有効であると考えられた”と述べている。

しかしながら、今回の調査ではT学生の学習を継続させるためには職場からの勤務調整の協力こそが最も重要ではないかと考える。なぜならば勤務調整とは仕事と学業の両立をうまく成立させるための条件であるからである。東¹³⁾は、勤務表作りの配慮として学校に通っている人に配慮するとして“働きながら学校へ通っているスタッフは、公休を登校に当てて、仕事と学業を両立させています(中略)。だから、学生をしている人の勤務表には、(中略)配慮していました”と述べている。働きながら学ぶ学生は、一方で仕事に対する義務意識も抱くことから、勤務調整の特別扱いを気遣う面があるにちがいない。だから当該学生は勤務調整で可能な限り、公休を登校に当てて、仕事と学業の両立を試みていると読み取れる。ただし、仕事と学業の両立のためには公休だけでは限界がある。職場の上司はそういう働きながら学ぶスタッフの不利な条件が理解できるから、履修に必要な勤務表作成には便宜を図っていると推測できる。働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立のためには、履修可能な勤務調整に対して、学生の努力と職場上司や同僚の理解や協力という相互関係が重

要であると考えられる。また、阪本¹⁴⁾は看護系大学院修士課程に学ぶ就労学生の分析をとおして、“「職場の上司や同僚の配慮：学ぶ権利の応援」というカテゴリーと次月の勤務表作成時、履修可能な勤務表の考慮などのサブカテゴリーを抽出し、働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立の要因”の一つとして述べている。確かに職場から勤務調整の配慮があれば、履修に必要な登校が可能となるなど「学ぶ権利の応援」につながると考える。

今回の調査では、ほぼ8割のT学生が「協力職場」である。本調査時期はコロナ禍で看護師不足がいられているなか、多くの職場がT学生の学習に協力してくれていることがわかった。しかし、残り約2割の「非協力職場」の学生は職場の勤務調整で協力が得られていなかった。つまり、後者の場合、職場は家庭や学校生活との両立に配慮してもらえず、学ぶ権利を応援してもらえていないという認識ではないだろうか。職場からの協力の有無と『職場は勤務調整に協力的である』との関連が強かった理由は、勤務調整で協力が得られない場合、履修科目や家庭生活との大事な予定と重複し不利な条件におかれ、仕事と学業の両立がどうしても難しくなるからではないか。そのため、T学生は職場協力の中でも勤務調整で協力してもらえることを最も希望し、そのことが職場協力の有無と勤務調整の協力との関連が極めて強い理由となったと考える。

2 勤務調整の配慮がないことによる時間的制約

まず、『時間的に忙しくなった』で有意差が認められた理由について考える。両群とも他の項目よりも本項目の平均値は高い。T学生は学生生活状況の中でも特にタイトなスケジュールを自覚している可能性があると考えられる。和田¹⁵⁾は、“大人の勉強において多くの人の最大の関心事は、時間の使い方にあるようだ。実際、社会人をやりながら、何らかの勉強を始めようという場合、一般の学生に比べてはるかに時間的なハンディキャップを負

うことになる”と指摘している。成人である T 学生は一般の学生に比べて、時間的なハンディキャップを負うのでシビアな問題である。また、和田¹⁶⁾は“限られた時間をどうやりくりするかで、現在行っている勉強の成否が決まるといっていいくらいだ”と述べ、時間を物理的に増やすことはできないと説明している。T 学生は職場、家庭、学校生活と多重課題を抱えている成人だから『時間的に忙しくなった』のは必然であると考ええる。その上に職場の勤務調整の協力が得られないという負荷は学生生活のスケジュールに対してさらに追い打ちをかける側面が考えられる。「非協力職場」は「協力職場」よりも勤務調整に応じてもらえないことにより、自身が許容できる限界を超えて、厳しい時間的制約の状況に追いやられ、『時間的に忙しくなった』という多忙感や無力感の自覚が増悪していることが理由で有意差が認められたと考える。

次に、『睡眠時間が短くなった』と職場からの協力の有無との関連があった理由について考える。津田ら¹⁷⁾は、経済的困難下にあり、アルバイトをせざるを得ない看護学生のアンケート調査を実施し、“生活費や学費のためにアルバイトをしている学生は、睡眠時間が短く、食事が不規則になり、授業中に疲労感を感じ、学業に困難を感じる傾向にあった”と報告している。就労に軸足が移りすぎると、自由な時間的余裕がなくなるのは必然であり、学業に取り組む時間確保で睡眠時間が短くなり過酷な状況に追いやられると考える。同様に T 学生の職場において勤務調整が非協力的であれば、職場の勤務命令に従わなければならない、学業や家庭生活のスケジュールに不利益がある。学生生活では「非協力職場」の T 学生は、さらに学習時間の確保に追われ睡眠時間を削るという窮地に立たされるだろう。両群の間で『睡眠時間が短くなった』の平均値で有意差が生じた理由は、職場の勤務調整の非協力による時間的制約の状況が招いた結果が一因であると考えられる。

3 今後の課題と本研究の限界

前田ら¹⁸⁾は、看護師学校養成所 2 年課程の最終学年在学の准看護師に対し、どのような支援があれば准看護師が看護師養成課程への進学に結びつくかというアンケート調査を実施して、“【金銭的な不安の解消】(中略)のカテゴリが得られた”と報告している。しかしながら、本調査の学生生活状況 35 項目のなかで最も平均値が低かったのは『職場は経済的な支援をしてくれている』である。両群ともに職場から経済的支援を講ずる職場が少ないことが浮き彫りになる。T 学生自身も自助努力で経済的問題を解決し進学している状況が考えられる。しかし、自助努力だけでは限界があり看過できない。T 学生に対する経済的な支援は重要である。日本看護協会¹⁹⁾は、“看護師資格取得を目指し看護師学校養成所 2 年課程(通信制)に進学する方を経済的に支援することを目的に、2009 年に本会会員の声を受けて”として、奨学金制度を創設して支援している。一部の病院では准看護師職員に対して、奨学金の給付金制度で 2 年課程進学を支援していると聞くが極めて少ないと思われる。T 学生の切実な声を受けて経済的支援を講ずる職場が増えることを期待したい。

一方、「非協力職場」の T 学生は、勤務調整で配慮が得られないため不利な時間的制約を背負っており、学ぶ権利を応援してもらえていないというフラストレーションを抱え続けている恐れがある。近本²⁰⁾は、“不安やフラストレーション、やるせなさや無力感、やり場のない憤りなどを抱え続けることは、看護スタッフ自身の心身の健康、ウェルビーイング(幸福感)や、仕事のやりがいにも大きな影響を与えかねません”と述べている。「非協力職場」の T 学生は心身の健康にも影響があることが推測される。しかし、両群の間で「レポート課題に対する状況」や「その他の学習状況」では関連は全くみられなかったのはなぜだろうか。通信制課程看護学生が就業上の責務を担いながら日々の生活環境を整え、継続した学習行動がとれている

行動の動機について、塚本ら²¹⁾は“看護師の国家資格取得への想いが強く影響し、(中略)目標達成に向けた強い意志が関与している”と述べている。「非協力職場」のT学生は厳しい時間的制約という逆境にもかかわらず、看護師の国家資格取得という目標達成のため、継続した学習行動の動機づけになっていると考える。時間的制約が厳しいにもかかわらず目標達成を目指すという、T学生の学習姿勢の偉大さが浮き彫りになったと考える。

今後、質的研究で「非協力職場」のT学生に焦点を当て、個別のインタビューを通して、学生生活状況の調査研究を進め、詳細な解明を目指したい。他方、T学生を送り出す側の職場の上司や同僚にも調査をする必要があると考える。

VI 結論

職場協力では勤務調整の配慮が必要である。時間的制約が厳しい中、目標達成を目指す学習姿勢が示唆された。

謝辞

本調査にご協力いただきました2年課程(通信制)短期大学看護学生の皆様に深くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 高宮洋子, 西出順子, 山岡紀子, 柳生敏子, 小坂素子, 中野順子. 短期大学看護師2年課程(通信制)への入学動機と入学後の学習継続に影響を与える要因の分析. 日本看護学教育学会誌. 2009, vol.19, p.121.
- 2) 金川治美, 西出順子, 武ユカリ, 小坂素子. 2年課程(通信制)看護学科における入学前教育の実施と検討: 授業終了時調査の自由記述からみた特性. 日本看護学会論文集: 看護教育. 2013, Vol.43, p.90-93.
- 3) 松原渉. 2年課程(通信制)短期大学の看護学生におけるテキスト学習に臨む学習姿勢と入学後の生活変化との関連. 神戸常盤大学紀要. 2021, 14号, p.75-86.
- 4) 松原渉. 成人期前期と成人期中期にある2年課程(通信制)看護学生の生活状況における特徴の比較検討. 神戸常盤大学紀要. 2022, 15号, p.37-48.
- 5) 狩谷恭子, 黒田美和子. 病院に勤務する准看護師の看護師養成所2年課程(通信制)進学希望の有無とその影響要因. 日本看護学会論文集: 看護総合. 2008, 39号, p.84-86.
- 6) 西出順子, 金川治美, 武ユカリ, 小坂素子. 入学前授業終了調査からみる入学前の不安と年代特性. 神戸常盤大学紀要. 2013, 6号, p.57-66.
- 7) 中島幸江, 佐藤禮子. 看護師養成2年課程通信制で学ぶ准看護師の仕事と学びを両立させるための学習環境に関する研究. 日本看護学会論文集: 看護管理. 2009, Vol.39, p.93-95.
- 8) 前田幹香, 西川裕美, 島田真由美. 看護師学校養成所2年課程の最終学年在学准看護師の進学に関する支援ニーズ. 神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要. 2020, 10号, p.27-31.
- 9) NHK. 看護師が足りない. ニュースアップ. 2021年4月20日12時51分. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210419/k10012977321000.html>, (参照 2023.1.2).
- 10) 重点政策2. 専門職としてのキャリア継続の支援. 「ガイドライン」勤務表作成者のためのQ&A. 日本看護協会 労働政策部. <https://www.nurse.or.jp/nursing/shuroanzen/yakinkotai/guideline/faq/index.html>, (参照 2022.11.22).
- 11) 中島幸江, 佐藤禮子. 前掲書7). p.93-95.
- 12) 水上美津子, 井上由紀子, 徳宿亜紀. 看護師2年課程通信制進学のための就学支援策の検討. 日本看護学会論文集: 看護管理. 2008, 38号,

p.228-230.

- 13) 東志乃. 特集 1, 勤務表の作り方: my こだわりポイント. 精神看護. 2013, 01. 16. no.6. p.27.
- 14) 阪本恵子. 働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立の要因: 看護系大学院修士課程に学ぶ学生の分析をとおして. 人間と科学. 県立広島大学保健福祉大学雑誌. 6(1). 2006, p.91-102.
- 15) 和田秀樹. 大人のための勉強法. PHP 新書 112. PHP 研究所, 2015, p.135.
- 16) 和田秀樹. 前掲書 15). p.134.
- 17) 津田聡子, 早川ゆかり, 兼子夏奈子, 乾友紀, 清水隆裕, 有村優範, 黒野智子, 藤本栄子, 安田智洋. 看護学生のアルバイトと生活実態に関する調査: 自主学修時間の確保の現状と課題. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2021, 29号, p.15-25.
- 18) 前田幹香, 西川裕美, 島田真由美. 前掲書 8). p.27-31.
- 19) 看護師学校養成所 2 年課程 (通信制) 進学者に対する奨学金. 日本看護協会.
<https://www.nurse.or.jp/nursing/education/scholarship/ninenkatei/index.html>,
(参照 2022.5.01).
- 20) 近本洋介. 特集, 組織で取り組むメンタルサポート 慢性ストレスにさらされるスタッフを支え, バーンアウトや離職を防ぐ: COVID-19 緊急事態下における看護師のためのセルフ・ケアアイデア集. 看護管理. 2021, 31 巻 11 号, p.1016-1017.
- 21) 塚本郁子, 天野勢子. 看護師 2 年課程通信制入学後の学習行動と心理状態. 日本看護研究学会雑誌. 2009, Vol.32, No.3, p.253.